平家物語『先帝身投』確認テスト（壇ノ浦）　解答・解説

■ 解答・解説

問1 （訳）私の身は女であっても、敵の手にはかかるまい。／解説：「なりとも」は逆接の仮定（…であっても）。「まじ」は打消意志「…まい・…するつもりはない」。敵に捕らえられて辱めを受けまいとする二位殿の決意を表す。

問2 打消意志（…まい・…しないつもりだ）。／解説：主語が一人称「我が身」であることから、打消推量ではなく打消意志ととる。

問3 ・「せ」＝尊敬の助動詞、「給へ」＝尊敬の補助動詞（いずれも尊敬語）。・作者から安徳天皇（主上）への敬意。／解説：「せ給ふ」は二重敬語（最高敬語）で、天皇など最高位の人物に用いる。

問4 ウ／解説：「あきる」はここでは「驚きあきれる・ぼんやりする」の意で、幼帝が状況をのみこめずぼうっとしている様子を表す。現代語の「あきれる（あきれ返る）」とは意味が異なる古今異義語。

問5 （訳）尼御前よ、私をどこへ連れていこうとするのか。／解説：「尼ぜ」は「尼御前」で二位殿への呼びかけ。「いづち」＝どこ。「具す」＝連れていく。「ん（む）」＝意志。

問6 安徳天皇が二位殿（祖母）に対して言った言葉。／解説：幼い天皇が事情をのみこめないまま尋ねる、いたいけな問いかけである。

問7 意志（…(し)ようと）。／解説：「具してゆかんとする」で、主語の動作の意図を表す。直後に「とする」が続く点も意志ととる手がかり。

問8 ・「申させ給ひ」＝（二位殿が天皇に）伊勢大神宮へお別れを申し上げなさるよう勧める言葉で、動作の主体である安徳天皇への敬意。・「おぼしめし」＝同じく安徳天皇への敬意。／解説：いずれも二位殿の発話の中で、天皇の動作を高めている。

問9 前世の善行によって天皇として生まれたものの、悪い因縁に引かれて天皇としての運命がもはや尽き果て、平家とともに滅びる定めとなった、という状況。／解説：仏教の因果（前世の十善の力で天子に生まれた）と無常（運が尽きる）を対比的に述べている。

問10 完了の助動詞「ぬ」の終止形。ナ行下二段型に活用する完了の助動詞で、ここでは「尽きてしまった」と動作の完了を表す。／解説：直前が連用形「給ひ」であることからも完了「ぬ」と判断できる（打消「ず」の連体形なら下に体言が続く）。

問11 天皇は伊勢神宮にまつられる天照大神の子孫とされ、皇室の祖先神にあたる。そのため、死を前にしてまず東（伊勢の方角）を伏し拝み、祖先神である伊勢大神宮に別れを告げさせようとした。／解説：その後に西（西方浄土）を向いて念仏する流れと対応している。

問12 安徳天皇（主上）。／解説：山鳩色の御衣・びんづらは幼帝の装いで、「結はせ給ひて」の最高敬語からも主語が天皇とわかる。

問13 （訳）波の下にも都がございますよ。／解説：「候ふ」は「あり」の丁寧語で「ございます」。死後の世界にも都（安住の地）があると言って幼帝をなだめる言葉。

問14 丁寧語（「あり・をり」の丁寧語「候ふ」）。／解説：聞き手である安徳天皇に対する敬意を表し、ここでは話し手（二位殿）の丁寧な気持ちを示す。

問15 死を恐れる幼い天皇を、これから入水するのだとは言えず、波の下にも都という安らかな世界があるのだと教えることで、おびえる天皇を安心させ、ともに死出の旅へ向かおうとする、いとおしくも哀切な祖母の心情から出た言葉である。／解説：直前の浄土往生を願う言葉と重ね、悲劇を慰めの言葉で包む点に名場面の哀れがある。

問16 西方浄土（極楽浄土）。／解説：「極楽浄土とてめでたき所」をさし、海の底すなわち死後に往く理想の世界を「都」と言いかえている。

問17 （訳）（はるかに深い）海の底へお入りになる。／解説：「千尋の底」＝非常に深い海の底。「給ふ」は尊敬の補助動詞で、二位殿（および天皇）への敬意。

問18 結びの語＝「給ふ」、活用形＝連体形。／解説：係助詞「ぞ」を受けて、文末が終止形ではなく連体形「給ふ」で結ばれている（係り結びの法則）。

問19 まだ八歳という幼さでありながら、年齢よりも大人びて美しく、あたりが照り輝くほど気品にあふれた姿として描かれている。その幼さと高貴さゆえに、入水の悲劇がいっそう痛ましく感じられる。／解説：「御としのほどよりはるかにねびさせ給ひて」が大人びた気品、「尼ぜ、われをば…」の問いが幼さを示す。

問20 ・軍記物語。・無常（無常観）。・琵琶法師。／解説：『平家物語』は鎌倉時代成立の軍記物語で、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」に始まる無常観が全編を貫く。琵琶法師による平曲（語り）として広まった。